《書評論文》

社会を持たない人々のなかで社会科学をする
――マリリン・ストラザーン『部分的つながり』をめぐって――

橋爪太作

I. はじめに

マリリン・ストラザーンは、ニューギニア高地をフィールドとするメラネシア[(1)]研究者であり、1980年代後半からはその独自のメラネシア社会論をもとに、メラネシアの儀礼や贈与交換と西欧の科学技術や法権利を対称的に分析する比較人類学によって学際的な注目を集めてきた。

これまでストラザーンは主に人類学とその隣接分野（主にB・ラトゥール系の科学技術社会論）から関心を持たれてきた[(2)]。他方本稿では、こうした人類学固有の文脈を共有しない他の社会科学諸分野の読者を視野に入れて、彼女の理論的主著『部分的つながり』（Strathern [2004=2015]）（原著刊行は1991年）を、前著『贈与のジェンダー』（Strathern [1988]）と1960年代以降のメラネシア人類学の展開に遡りつつ、その社会記述における可能性を示したい。

II. メラネシア人類学の黄昏に

II.1. 戦後メラネシア人類学の栄光と没落

メラネシア最後のフロンティアであったニューギニア高地がはじめて本格的な開発と調査の対象となったのは、第二次世界大戦終結後のことである。その後、構造主義の流行と軌を一にする贈与交換論ブームのなかで、ブタを焦点とした複雑な交換制度をもつこの地は世界的に注目されるフィールドとなり、1960～80年代にかけて大量の民族誌データが蓄積されていく。ストラザーンが最初の主著を出版した1988年は、こうしたメラネシア人類学の黄金時代がそろそろ終わりを告げようとしていた頃である。

しかし、一つの時代の終わりに可能になることもある。当時すでに儀礼やジェンダー観、親族形態などの個別の分野については詳細なデータが揃っていたが、それら諸実践を総合する基底的な次元において、西欧近代的な「社会」とは違うメラネシアの社会性をどのように概念化すればよいのかについては、空白地帯のままであった。

II.2. 社会科学とカーゴ・カルト

70年代以降のメラネシア人類学では、普遍的なシステムや構造に代えてローカルな意味作用を重視する同時代の象徴人類学的な研究潮流の影響を受けつつ、メラネシア人たちの生き方を理解する上で、社会と個人という近代社会の枠組みは有効ではないという認識が次第に生じていた。そこで生じるのが、私たちの側の探求の物差しとなる「社会」という概念と、それを持たない人々の関係をどのように考えればよいのかという問題である。

そうした問題に対し最も徹底した回答を与えたのが、のちにストラザーンの盟友となるシカゴ大学の人類学者R・ワグナーである。彼の代表作『文化のインベンション』（Wagner [1981=2000]）では、ふつう人類学的記述の最も基底に位置する説明項と考えられている「文化（や社会）」自体が、「彼ら」との遭遇のなかでその度ごとに「発明 invent」されるものとしてとらえ直される。また発明自体は両者に対称的に起こることなので、「彼ら」の側にも私

たちの「社会」の双子が存在する。たとえばカーゴ・カルト運動では、ちょうど西欧人が何故西欧だけに近代社会が成立したのかとくり返し問うように、メラネシア人たちが、何故白人に力があり自分たちが無力なのかという社会科学的な問いを、白人たちの真の力の源泉である缶詰や汽船や会社（カンパニ）といったモノ（「カーゴ」）の模倣と獲得の連鎖を通じて分析しようとしたのである（Wagner [1981=2000], cf. 春日[2007]）。

II.3. メラネシアから「社会」を考える

「カーゴ」と「社会」の違いは、「私たち」と「彼ら」それぞれの発明のやり方の違いである。だが、それぞれの発明の系列の起点には、自他の境界自体が識別不能になる出来事の場が存在している。人類学者のフィールドワークとは、彼らの「現実」をよりよく認識したり、あるいは両者の共通項を見出すことに留まるものではない。むしろその本質的な部分は――ちょうど西欧文明を経験したメラネシア人たちが本当の自分たち＝白人になろうとしてカーゴ・カルトに身を投じていったように、あるいはそれを目撃した白人の行政官たちが深い懼れを感じたように（春日[2007：76]）――そうした理性の手前に忍び込む、もしかすると私たちも彼らのように考えてしまっているのではないかという自己喪失の感覚にあるだろう。

ワグナーの洞察を引き継いだストラザーンが『贈与のジェンダー』において取り組んだのは、そうした経験をより概念的なレベルで展開すること、具体的には私たちの「社会」という概念をメラネシアという他者の中で徹底的に作り替えることであった。

III.「社会化」モデルの批判

III.1. イニシエーション儀礼をめぐる問題

ここで、この時代の著名なメラネシア民族誌にして、社会学、精神医学など広い分野に影響を与えたG・ハートによるサンビア族の男性結社研究（Herdt [1994]）（原著刊行は1981年）を例にとって、当時のメラネシア人類学の限界と、ストラザーンによる革新点を具体的に追跡してみよう。

ニューギニア高地周辺部で暮らすサンビア族は、植民地支配の到来までは他部族や自部族内部での戦いに明け暮れる厳しい生活を送っていた。そこで社会的イデオロギーとして何よりも重視されたのは、多くの敵を殺す強い戦士＝男になることであり、女性は劣ったものとして社会生活の重要な場から排除されてきた。生まれたばかりの子どもたちは男女問わず母親の庇護のもとで育つが、数年後、男児のみが男性結社に隔離され、そこで野放図な少年たちを望ましい男性へと変化させるイニシエーション儀礼（同性愛、身体加工、戦争など）が行われた[3]。

サンビアの男性結社では男性性の象徴である笛、およびそれと比喩的に同一視されるペニスを新参者に咥えさせ、その体内に精液を充填しつつ少年を婚姻可能な男にしていくと言われている。ところが、その笛はじつは女の精霊によって活力を与えられていたり、笛自体が夫婦に分かれていたりする。このように、少年を一人前の男に仕立て上げるジェンダー実践の核となるモノに「女」が再出現するという矛盾がある。さらに、笛のような「象徴」のレベルだけではなく、「身体」のレベルでも同じような矛盾があり、たとえばすでに成人した男たちのペニス自体が白濁液[4]を出す器官という意味で女の乳房と同様だとされる。結局、あるレベルでモノや個人が持つ「男」や「女」といった属性は、いつの間にか別のレベルを通じて容易につながってしまい、まったく当てにならない（cf. Strathern [2004=2015：173-198]）。ハートはこうしたイデオロギーと知覚の矛盾を、男たちによる自らの男性性への深刻な疑義の現れとして理解し、結論においてはイニシエーション儀礼の意義を本源的なもの（女性）の上に男性性を

人工的に構築していく文化的装置としてとらえようとしている（Herdt [1994：315]）。

III.2. ストラザーンによる批判と再構築

ストラザーンは『贈与のジェンダー』において、メラネシア人類学がこうした西欧的な自然／社会区分に基づいた社会化モデルから脱出する必要性を提唱する（Strathern1988：11-21）。その上で先のハートの民族誌について、彼がこだわるイデオロギーと知覚の矛盾以前の問題として、そもそも男性結社のイニシエーションで問題となっていることは、成人した男が持つ精液をそれを持たない少年に注ぎ込むことを通じて後者の人格を構築することではないという。反対に、人々が行っているのは精液／乳やペニス／乳房を男性化することである（Strathern [1988：212-213]）。

まず、本質的にはあらゆる男は、父母両方に由来する物質が入り交じっている両性具有者とされる。ところが母親から切り離された結社では、ちょうど同じ笛でもそれに挿入するかそれを挿入するかでまったく違うものになるように、儀礼的同性愛における挿入／被挿入という非対称な役割分化を通じて、前者が「女」、後者が「男」を割り振られる。しかし、「男」である年長者の側が自らの持つ器官や物質の属性が曖昧であるのを知っているのに対し、「女」である年少者にそうした知識は隠蔽されている。結果として彼は隠喩的な「男」の物質を文字通りに受け取り、「男」へと育っていく（Strathern [1988：211-212]）。そうして自身が年長者になった年少者は、それまで自分が飲んできた精液がじつは女の胸から出る液体でもあり得たという秘密を知り、今度は自ら「男（女）」の部分を放出していく。だが、それは彼が自己認識として「女（男）」になっていくということではなく、外部に客体化された物質との間で換喩的[(5)]な男性というアイデンティティを受け取るのである（Strathern [1988：213-214]）。こうした関係は、さらに成人して女と結婚したあとの振る舞いにも延長される。女役の年少者に挿入する男役の年長者にとって、彼はかつての自分であるだけでなく、未来の妻を予期するものでもある（Strathern [1988：215]）。

III.3. 「自己への配慮」としての儀礼

こうしたジェンダーのあり方は、生物学的二項対立を前提とした上で、権力やジェンダーがあたかも市場で売り買いされる商品のように個体の間を移動すると考える私たちのそれとは全く異なっている。「男：女」のような二項対立自体は確かにあるが、それはひとまずは行為者（ex. 年少者）に両者の相互作用から新たな単一項（ex. 年長者）を生産させるための動機でしかない。ところが、二項対立に潜在する残余（ex.「男：女：：精液：経血」という二項対立を混乱させる「精液は女の乳でもありうる」という知識）は、そうした外的な対立自体を行為者自身の内側に折り返し、反対に内側にあるもの（ex. 精液）を外側に引き出すことを通じて、新たな相互作用とそれによる新たな二項対立を打ち立てていく。

たしかに行為者の意識と行為はズレているが、そのズレは何らかの外在的・超越的な基準で測られるものではなく、反対に当人の行為の動機・基準であった二項対立自体が内在的に反転してしまうことによって露呈する。そして反転した二項対立は、それまでの諸々の項を入れ子状に含みながら、新たな行為の動機・基準となっていくのである（cf. Strathern [1988：303-304]）。

従来のメラネシア人類学は、個別のもの（＝身体・自然）の上に普遍的・超越的な法を課す装置としての儀礼（＝文化・社会）という想像力から抜け出すことができなかった。対してストラザーンは、メラネシアの社会的実践を人々が自らに内在する知識や能力を知り、その力を他者へと行使しうるようになるための諸実践

――これはまさに「自己への配慮」（Foucault [1984=2006]）に他ならない――としてとらえることを可能にしたと言えるだろう。

IV. 社会からイメージへ

IV.1. 寓話としての戦後メラネシア人類学

『贈与のジェンダー』において問題となっていたのは、私たちの「社会」という概念をメラネシアの実践の中で問題化することであった。それから３年後に刊行された『部分的つながり』でストラザーンが注目するのは、メラネシア人ではなくそれを記述する人類学者の側の実践である。

戦後メラネシア人類学において、複数の部族が割拠するニューギニア高地は、個々の集団における儀礼や政治形態、生業などのさまざまな実践を比較することを通じて、より大きな「社会」を描きだすための格好のフィールドとして見なされていた。しかし実際のところ、単位間の独立性を確保しつつそれらを俯瞰しようとする人類学者の努力は、当人たちの認識の前提にすでに他の諸集団との比較が畳み込まれていることによって、あるいは現地人自身による他集団からの意表を突く借用の実践によって、常にかき乱されてきた（Strathern [2004=2015：160]）。ここに至り、個々の要素から切り離された超越的な視点としての「全体」なるものは到底成立しがたい。

彼女はこうしたメラネシア人類学の歴史を、フィールド＝作者＝民族誌の関係を問題化した1980年代以降のポストモダン人類学の理論的議論に対応する、ある種の寓話的な状況として見なす。理論的・経験的議論のいずれにおいても、民族誌とはもはやフィールドの現実をありのままに写し取る表象というよりは、ちょうど近代人にとっての大都市のように、決してその全貌をポジティブに把握できない現実に対する一種のアレゴリーなのである（Strathern [2004=2015：80-81], cf. 若林[1997]）。

ただし彼女が見るところでは、全体の到達不可能性の代わりに断片の再結合を強調するポストモダン的なアレゴリーは、西欧的な「個人」の形象を抜け出せていない。彼女は、ポストモダンにおける民族誌の目的を、「自己を社会の中へと再統合、再同化し、日常生活における振る舞いを再構成すること」（Tyler [1986=1996：249-250]）だと提唱するS・タイラーの言葉を取り上げ、そうした断片化を言祝ぐ議論においては、断片を総合する何らかの創造的な主体（消費者、リミキサー etc……）が暗黙裏に前提とされていること、にもかかわらずタイラーはそこに「社会」というさらなる次元を付け加えざるを得なかったことに注目し（Strathern [2004=2015：89-92]）、ポストモダンが温存した伝統的な個人主義の背後にある、ある種の集合的な次元を考えることへと問題を差し戻す。

IV.2. 「一」と「多」の関係を別様に展開させる

むろん、『贈与のジェンダー』を経たストラザーンにとって、個人の対立項として素朴に考えられるような「社会」の概念は到底受け入れられるものではない。そこでそのメラネシア的な分身として立ち現れるのが「イメージ」である。どちらもある種の「一」と「多」をめぐる思考様式に関わっているが、（西欧近代で支配的な）前者は「一」を前提にその外在的な関係性として「多」を考えるのに対し、（メラネシアで支配的な）後者は本質的に「多」である関係性を前提として、その中で「一」が析出していくプロセスに着目する（cf. Strathern [2004=2015：271-272]）。

潜在的に無限な関係性の中から人々が個体化を果たすためには、その「一」なる形象をどこからか受け取らなければならない。メラネシアにおいてその役割を果たすのは、さまざまな属性を帯びたモノや特定の歴史的出来事の記憶のような、潜在的には多義性や反転可能性を秘め

ながら、現実的には明瞭に輪郭づけられた単一のモノである。たとえばサンビアのジェンダー実践において、男でも女でもありうる笛、あるいは少年自身の曖昧な身体は、人々の成長を内側から形づくる／その結果として現れる一つのイメージと見なすことができるだろう。

イメージの連鎖はその基底となる隠喩 root metaphor に端を発しており、個々のイメージはそうした最も包括的なイメージへとつなぎ止められている。ストラザーン自身がそうしたイメージを「基底となる社会性 grounding sociality」（Strathern [2004=201：271]）と呼んでいるように、それは私たちの「社会」との類比でもとらえられるようなある種の究極的な全体性である。だが同時に、それぞれが特定のイメージとしてとらえられる個々の儀礼や身体や知識や道具は、現実に育てられたり裏返されたり切り取られるような（Strathern [2004=2015：270]）出来事に晒されるモノでもある。こうしたプロセスの中で、ある全体的なイメージが知覚不可能な多数性へと解体していったり、あるいは別の全体的なイメージに取って代わられたりといった運動が起こっていく。

IV.3. 私たちのいまへのはるかなる視線

ストラザーン的な立場からすれば、何が全体かを予め措定すること（＝近代）も、全体が措定不可能であることを予め措定すること（＝ポストモダン）も、ある種の近代社会内部の想像力の裏表であろう。その代わり彼女は、「全体」なるものを分析の背景から対象へと移動させ、諸力の結び目としてその都度立ち現れる社会性の生成と消失を経験的に追跡しようとする。ここにおいて、彼女は『贈与のジェンダー』に対しても重要な方法論上の乗り越えを行っている。これまで見てきたように、２つの著作は社会記述における超越的な定点の徹底した排除という点では、確かに同一線上に位置づけられる。だが、あくまで「メラネシア」という地域的な枠組みを保持しつつ書かれた前著は、「創発的でダイナミックなメラネシア社会」のような超越的な定点を観察者の側に新たに再生産してしまう嫌いがないとは言えない[(6)]。それに対し『部分的つながり』は、そうした学問のもつ俯瞰的視点自体のさらなる相対化――近代社会科学の実践をメラネシア人たちの実践と意図的に対等なものとしてモンタージュすることを通じて、両者の間で予想もしなかった不気味な類似を引き起こし、さらにそこから前者を改変すること――が目論まれている。

ストラザーンがメラネシアから引き出したイメージ／社会は、「人間」や「社会」のような自同律的な反省より深い、人工物や自然といった非人間的なアクターを含む「外」の領域との関わりから成り立っている。笛や精液の流れに侵襲されることによってはじめて自らの身体に潜む「男」としての知識と身体の双方を獲得するサンビアの少年は、一見すると私たちとは疎遠な存在のように見えて、さまざまなテクノロジーの中で常に介入と再編を受けている私たち自身の姿とさほど遠くない。本書は、遠い世界をアクチュアルなものとして読み直し、いま・ここに潜在する無数の異質なものたちを追いかけていくための導きとなるだろう。

註

1. オセアニアの中でもパプアニューギニア、ソロモン諸島、ヴァヌアツ、ニューカレドニア、フィジーといった島々は、とくにメラネシアと呼ばれる人種的・文化的な集合をなしている。
2. この分野における欧米、日本を含めた現在までのストラザーン論の主要なものとしては、Gell [1999]、

Holbraad and Pedersen [2009]、モハーチ・森田[2010]、里見・久保[2013]などが挙げられる。

3. サンビアの男に言わせると、女児はひとりでに女に育つが、男児は精液を飲ませてやらないと男にならない（Herdt [1994：216]）。
4. サンビアの人々は母乳と精液を基本的に同じ物質と考えている（Herdt [1994：100]）。
5. 隠喩的な贈与と換喩的な贈与という区分自体は、もともと「私的」な領域での人格の直接的な形成を、「公的」な領域における人格間での客体化された財のやりとりと同じ「贈与」という概念で理解するために、後者の区分を前者に拡張する形で作られた概念である。ストラザーン自身は「非媒介的な交換 unmediated exchange」と「媒介的な交換 mediated exchange」（Strathern [1988：178]）と言い換えているが、この用語法は、私たちにとっては「交換」とは見えない人格や養育のような領域が、じっさいには財のやりとりと密接に結びついているというこの地域（およびM・モースが定式化した贈与経済）の特性に基づいている。彼女はさらに後者の区分を、狭義の贈与交換を越えて、客体化されたモノのやりとりにまで拡大して使っている。
6. ストラザーンの影響下に始まった New Melanesia Ethnography と呼ばれる一連の動向では、土地や親族やモノや環境が人々を包み込みつつ個々の人格へと身体化されるような、個人／社会や文化／自然を横断する超時間的な関係性としてメラネシア社会を描きだす傾向が見られる（cf. Leach [2003]）。

文献

Foucault, Michael（1984）“L’éthique du souci de soi comme pratique de la liberté,” *Concordia Revista international de filosofia*, 6. =（2006）廣瀬浩司（訳）「自由の実践としての自己への配慮」『フーコー・コレクション５：性・真理』筑摩書房.

Gell, Alfred（1999）“Strathernograms, or the Semiotics of Mixed Metaphors,” in Eric Hirsch（ed.）, *The Art of Anthropology: Essays and Diagrams*, London and New Brunswick, NJ: The Athlone Press.

Herdt, Gilbert（1994）*Guardians of the Flutes: Idioms of Masculinity*, Chicago and London: The University of Chicago Press.

Holbraad, Martin and Pedersen, Morten A.（2009）“Planet M: The intense abstraction of Marilyn Strathern,” *Anthropological Theory*, 9（4）: 371–394.

Leach, James（2003）*Creative Land: Place and procreation on the Rai Coast of Papua New Guinea*, Oxford: Berghahn Books.

春日直樹（2007）『〈遅れ〉の思考：ポスト近代を生きる』東京大学出版会.

モハーチゲルゲイ・森田敦郎（2011）「比較を生きることについて：ポストプルーラル人類学へ向けて」『哲学』125：263–284.

里見龍樹・久保明教（2013）「身体の産出、概念の延長：マリリン・ストラザーンにおけるメラネシア、新生殖技術をめぐって」『思想』1066：264–282.

Strathern, Marilyn（1998）*The Gender of the Gift: Problems with Women and Problems with Society in Melanesia*, Berkeley: University of California Press.

———（2004）*Partial Connections*（*Updated Edition*）, Walnut Creek: AltaMira Press. =（2015）大杉高司・浜田明範・田口陽子・丹羽充・里見龍樹（訳）『部分的つながり』水声社.

Tyler, Stephen A. (1986) "Post-Modern Ethnography: From Document of the Occult to Occult Document," in James Clifford and George Marcus (ed.), *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, Berkeley: University of California Press. = (1996) 春日直樹・足羽与志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子(訳)「ポストモダンの民族誌」『文化を書く』紀伊国屋書店.

Wagner, Roy (1981) *The Invention of Culture* (*Revised and Expanded Edition*), Chicago and London: The University of Chicago Press. = (2000) 山崎美惠・谷口佳子(訳)『文化のインベンション』玉川大学出版部.

若林幹夫 (1997)「地図、統計、写真：大都市の相貌」『10+1』9：196-206.

.

受稿2016年９月８日／掲載決定2016年11月21日